第 83 回日本社会学会大会
「若手企画テーマ部会」への派遣
報告集

標記のとおり、本大学院 GP から派遣された大学院生ら各自の報告を以下の様式に応じた形でまとめてもらった。なお、派遣要綱は末尾に掲載してある。

１．　氏名

２．　以下の（1）～（2）につき、報告文を作成し提出してください。

（1）派遣された若手企画テーマ部会「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」について、

① 報告と議論の内容について、自分の観点からの見解・批判（「要約」ではなく）を論じてください。（1,200 字程度）

② また、部会全体の進行など形式面についての改善点や気付いた点などを挙げてください。次年度以降の部会企画の参考にしたいと思います。（800 字程度）

（2）派遣された上記部会のほかに参加した部会・個別報告について、報告と議論の内容、および進行など形式面について（部会の場合）、自由に述べてください。（800 字程度）

１．　林　梅

２．

（1）

①

グローバリゼーションのなかにある流動性や均質性のなかで、移動と定住の関係は、「場」をめぐる野宿者と地域住民、アニメファンと地域コミュニティ、一つの対象としての若者ムスリムにとってのムスリム社会とイギリス社会、日本の若者にとっての都市圏と地元、さらには調査手法における調査者と被調査者の問題としても立ち現われている。ローカルな調査研究に共通する報告にあらわれる「場」を巡る二つの対象の対立関係や共存への試み、一つの対象における二つの側面の葛藤、さらにはその関係を調査する調査者の試行錯誤は、まさに、移動・定住の多様性を意味し、流動性や均質性に基づく解釈・解決の限界を示している。

地域や個人の独自性としての移動・定住を包含できる理論枠を考えるとき、「越境者とホスト社会の住民の移動するパワーという潜在能力」によって方向づけられる可能性、「可視化と不可視化」で議論することも大変有効である。しかし、そこに回収できない部分として、構造的に負の移動を強いられる人々の移動するパワーの獲得だったり、隠ぺいされた人々の可視化獲得だったりすることにおけるプロセスや二重性が存在する。たとえば、中国の留学生の増加傾向には明らかに高校や大学卒業後の進路における「サバルタン」的な要素がある。一方、彼ら彼女らが留学という移動には負の移動とは異なる強力なクリエーティブ性が備わっている。このことは、既存の社会構造への抗いでもあり、その「抗いのパワー」がもたらした生活の組み立てであり、人生設計である。隠ぺいさら者の可視化への試みにも同じく上述の問題が存在する。社会的弱者の「負の移動」にも、「上昇移動の欠如」と同時に「上昇移動の願望」があり、しかもその願望こそが移動パワーの獲得をもたらすものとしてとらえられる。また、社会構造において排除の危機にさらされるなかに行われるパワー獲得や移動といった実践のプロセスという緊張した状況にこそ、人と人の関係、人と社会の関係の深層があらわれるだろう。

また、「グローバリゼーションと移動・定住」の移動だけをとらえても、さまざまな次元で扱われていることがわかる。物理的移動に加え、負の移動、上昇移動、水平移動、都市志向、地元志向、さらには、構造的弱者の移動のパワー獲得のプロセス自体の移動も移動として取り上げられるわけである。移動を広義に扱うことは、議論参加の可能性を大きくする一方、議論のまとまりをあいまいにする傾向もあることを考慮して、移動の定義を明確にして、移動を分類化することで議論を深かめることが必要ではないかと考える。この問題は同時に定住の定義と分類化の試みも必要とする。それは、個々の独自性における移動と定住がどのようなものであるかを明確にすることで、分類化された移動と定住の理論に対置させることで、統合化を試みようとする立場からである。

②

気付いた点を以下二つ挙げることにする。

まず、発表時間を厳守することで、フロアーに討論を広げることが求められる。部会自体が集団的な外向けの発信であるので、フロアーにおける議論こそが最も重要な部分であると考える。発表者や議論に参加するもの全体において議論を共有してこそ有益で、議論がないまま、終了したことは形式的な部会あるいは内輪の発表にすぎないという批判を受けやすいと思う。

次に、発表内容に「対立軸」を作り、議論を盛り上げることが求められる。発表内容から議論できる「対立軸」を顕在化させることで、フロアーの興味を引くだけでなく、発表者間や発表者とコメンテーターの間でわかりやすく、まとまりがよい部会になるのではないかと思う。これは、部会を作り上げる若手研究者がその専門領域で優秀な存在であることからも期待されるものだと考える。

（2）

学会は、各研究者同士の連携やデータ共有の可能性を提供する「場」として意義があると同時に、その必要性を物語っている。たとえば、「エスニック移民の帰還と定住—韓国中国同胞事例を通じて」の一つを取り上げても言えることである。発表者の呉は、1991 年から 2009 年までの間に韓国国籍回復者の 27.371 人のなかで、11.694 人を占めている中国同胞とされる中国朝鮮族を対象に、定住化のプロセスや背景にある制度的影響の検討を行っている。調査対象は、二つのエスニック・コミュニティのメンバーを定めている。これは、質的調査を行う場合には必然的であるような選択であるが、インタビューを行った 24 人が 11.694 人を網羅できることが必要になる。しかし、韓国国籍の取得がどのような理由かによって大きくわかれる。それは、「こどもの呼び寄せができるから」といった一つを取り上げてもわかるように、国籍獲得者が韓国で生活しているかどうかが疑問視される。実際、「こどもを呼び寄せて」から本人が中国に戻って生活するケースが多い。これは、韓国国籍の取得が生活を組み立てるうえ、「戦略的利用」であることを示すもので、韓国で実際生活をしている人だけでは、国籍取得の中国同胞を表現できないということを説明する。

移動におけるホームランドと定住先におけるどちらの視点を欠いても、上記のような誤差を招き、結果に影響される状況が出来上がり、しかも容易に発見できないことすらある。よって、同じ対象や同じ理論を囲む研究者同士の連携やデータ共有は大きな意味をもっていると考える。

学会という「場」はこのような意味において、大切であるが、往々に時間制限があって十分な交流ができないこともある。しかし、「社会学がめぐりあう」きっかけとして、社会学を専攻する者にとって欠かせない「場」であることには違いない。

１．　尾添侑太

２．

（1）

①

山北氏の発表では、野宿者から見た移動と「定住」をめぐってのつながりと葛藤に観点が置かれていたが、とくに野宿者が抱えるジレンマの記述が非常に興味深く感じられた。「移動／定住」という二項対立的な図式は、山北氏の発表では重層を成しているのだというところに、マイホームを持つことは一人前の証のように「定住」を無意識に前提としているわれわれから見えてこないストリートの情景が存在する。移動型が増えてきているとあるが、個人的な関心からすれば、「野宿者―野宿者」「野宿者―地域住民」「野宿者―研究者・支援者」というそれぞれの関係（それは継続性が難しい？）において、その「つながり」をどのような意味のあるものとして捉えうることができるかということが問題になる。

安達氏の発表では、若者ムスリムがイギリスで「定住」すること／するために、グローバル化の中でどのようなアイデンティティを築いているかということが中心的なテーマであったが、「伝統／ポスト伝統」「宗教／文化」「文明／感情」といういくつかの対立的キーワードによって、遠い日本にいながら身近なものとして理解できた。逆にそのことで気になる点は、世代間の意識差という問題にすべてが回収されてしまう危険性はないのかということである。アイデンティティや文化や宗教を「持たない」若者にとっても、意識ということでいえば若者ムスリムたちの語りは非常に共感的でイメージしやすいものであった。むしろ知りたいと思うのは、先ほど対立的キーワードの中で葛藤する若者ムスリムたちの存在と意義である。その「定住しづらさ」を感じている者、移動を行った者たちの存在を知ってみたいと感じた。正直とっつきにくいテーマであったが、非常に自分の問題と引きつけて考えられる発表であったと思う。

稲津氏の発表は、5名の中ではフィールドの前提を問題とする意味では違ったアプローチであるとともに、曲がりなりにもフィールドを持つ者として非常に刺激的であった。中心的なテーマは「自己延長的なフィールドワーク」ということであったが、ひとつ気になった点は「移動する人びと」という場合の移動がどのようなことを想定しているのかということだ。この点は、山北氏や轡田氏の移動の観点とも関係してくる話になってくると思う。また稲津氏の今回は発表やその研究方法の視点というのは、どのような人びとを対象として調査しようとしているのかという問題に限定される話なのか、それともフィールドワークを行っているすべての者について共通のことなのかということを聞いてみたい。

谷村氏の発表では、ネット／地域の２つコミュニティが交錯する場を事例を通して描いたものであったが、ここでは移動する者＝地域外のファン／定住者＝地域住民という切り分けの妥当性が気になった点としてあがる。祭りの例でのヤンキー／オタクの切り分けでも同様の素朴な疑問が浮かび上がった。では「ノレない」オタクはどこにいるのか／行くのか。細かい話になるが、本論上に谷村氏がご自分で提起されたアニメロケとドラマロケの違いは、結局のとこ

ろ何であったのかの解答をぜひ聞きたかったと感じる。

轡田氏の「地元志向現象」は、承認班研究会でも一度お聞きしたが、改めて非常に興味深い話であった。都市型の地方（大阪、名古屋、松山、博多など）の「地元」はどのように考えられるのかということもあるが、それはひとまず今後の自身の考察に預ける。個人的には排除か包摂かという議論展開はあまり好みではない。もっとも興味深いのは、地元現象の 3 つ目の観点である「地元愛」である。土井隆義らを議論もあり、非常に個人的にテーマと重なる観点が盛り込まれており、実際の日常生活で非常にそのような傾向を確認できることが多々あった。

部会全体としては、やはり「移動」が持つ意味の重層性を一度マッピングすることが必要だと感じた。

②

司会の他に、塩原・五十嵐両 2 名の方のコメンテーターがいたことはこの部会の中では非常に大きな意味を持っていたと感じる。発表後の議論の深まりと関心の広まりが生まれ、部会全体が統一のテーマのもとに行われているということがより自覚できた。

改善点というわけではないが、タイムスケジュールの大幅なズレにより、全体討論がプログラムからなくなってしまったことはやはりかなり残念に感じられた。2 時間の枠の中で、それぞれの発表に多少のズレが生じることはもちろん起こりうることで、厳密に時間管理をすることが善いことだとは思わないが、それでも 1 名発表に割り当てられた 10 分にあまりにもばらつきがあり、フロアの外部の方の意見や批判を聞けなかったことは残念であった。また、山北・安達 2 名の方の発表は 10 分以内に収まっていたが、やはりあのような場合における発表ではコンパクトで簡潔になっており、聞いていてポイントを理解することができた。逆を言えば、後半 3 名は少し冗長な発表になったことがかえって重要なポイントを理解しにくくしたのではないかと思う。

あくまで「予定は予定」であると思うが、もう少し司会・発表の両側がスムーズな進行を念頭にはいれていただいても良かったのではないかと思う。個人的なことであるが、本学の承認研究班や夏期 GP 合宿に参加していたため、今回の部会の位置づけがやや内輪すぎる会であったような気もする（だから全体討論が欲しかった）。

（2）

「音楽と映画（文化・社会意識（２））」に参加したが、3 名の発表だったので比較的時間的に余裕があった。司会者が臨機応変に対応したので時間内で発表者とフロア討論にかなり充実したやりとりがみられた。

一人目の発表者は、音楽の社会性というタイトルで、音楽を社会学する意義と独自性を哲学的視点を交えながらの発表であった。ただし、直前報告内容を変更したということで、発表自体は混乱している内容で、目的と結果・意義が非常に曖昧なものであった。二人目の発表は、ウッドストック音楽祭に対する社会意識を世代といった観点から考察していた。パワーポイン

トを使用しており、非常にポイントを明確にしていたので理解しやすい内容であったと思う。質疑に対しても丁寧な対応で今後の課題などもあって非常に充実した発表だった。この部会では、3 人目の藤阪氏の発表を聞きにいったが、発表した 2 名が音楽学系ということもあり、テーブルにおける社会美学という独自な観点が、音楽学者・美学者の先生方と共有できず、本論ではなく前提となる「社会美学とは何か」という話に終始してしまったが残念に思えた。

学会発表では、どのテーマの部会でどのような発表者と同じになるか、また司会者がどのような人物かによって大きくその後の反応が変わってしまう難しさがある。個人的には、「コミュニケーション」系のテーマが去年に比べ減っていたのが残念であると同時に、自分の研究領域と立ち位置を明確しなければならないと改めて感じた。

１．　吹上裕樹

２．

（1）

①

まず、最初に司会者の側から問題提起がなされた。グローバリゼーションは世界の画一化・均質化を促すだけではなく、そのパラドキシカルな帰結としてローカル化の契機をはらんでいる。そのような前提のもと、実際の地域社会においてはどのような実践がなされ、どのようなリアリティが構成されているのだろうか。またそこでの人々の「出会い」を通じて、どのようなコンフリクトや協働が生まれているのだろうか、というものであった。

上の問題提起に答えるかたちで４人の登壇者が順に報告を重ねた。一人目の登壇者である山北氏は、野宿者の「移動と定住」に関して、「ストリート」というキーワードを媒介に議論された。私たちは通常、「ストリート」を移動の場として考えている。しかし山北氏が対象として論じる野宿者たちは、その「移動の場」であるストリートを住処として生活する。それは移動と定住の場をそれぞれ確定された領域に囲い込んできた通常の我々の視線には奇妙なものと映るだろう（こうした異化された現実は、山北氏がプレゼンの最初に提示した映像に表れていた）。一方で、山北氏も触れていた「ホームのストリート化」という観点からは、生活と移動の場を区分するこれまでの常識的な理解のあり方が相対化されてきている現状を見ることもできる。

「ホームのストリート化」とは、（正確な定義とは異なるかもしれないが）従来ならホームと思われていた生活の場がその実ストリートと化しているということをさす、あるいはストリートという移動の場のみがホームたりうる場として残されているという含みを持った言葉であろう。このことは、直接には不安定な収入と職を余儀なくされる派遣労働者たちの生活に該当するだろうし、あるいはこの後の轡田報告において取り上げられたようなグローバル資本主義に飲み込まれる「地元」そのもののあり様に該当するかもしれない。だが、もう一つこの言葉から思い起こされるのは、ボヘミアンで自由で流動的な、一種の「クリエイティヴ・クラス」（R・フロリダ）の生活であり、都市におけるシェアハウスや低家賃のアパートを住処として浮動的に生きることを肯定的に捉えるものである。こうした流動性を創造性とすりかえる思考からは、野宿者の生活ですら何らかのユニークネスを認められ、価値を創造するものと捉えられかねないかもしれない（コメンテーターの五十嵐氏は「貧困」は資源たりえないといっていたが、ここではそうしたクリエイティヴ・クラスと野宿者との間にはっきりした境界を引くことが理念上困難であることを問題にしたい）。

このような議論との関わりの上に、谷村報告の「アニメ聖地」と「町おこし」とのつながりを考察することもできよう。グローバル化の流れの中で、産業構造の転換に上手く乗れなかった地方都市は、何らかの差異を創出することによって町を「ブランド化」しなければならないとされる。そうした際に、コメンテーターの五十嵐氏も言っていたように、外部のまなざしに

よって承認されうるような可視化された差異を地域に付与する必要がでてくる。「アニメ聖地」化というのも、そうした差異（＝価値）を創出する一つの装置といえるが、ここでの谷村報告の要は、こうした現象をミクロに眺めた場合の、異なる立場にある人々の予期せぬ「出会い」に置かれていたといえる。こうした聖地化の動きは、地元住民の間に「ノれる／ノれない」をめぐってコンフリクトを生み出す場合があるという。だがここでの谷村報告にあったような事例が、単なる一過性の流行現象として終わってしまわないためには、こうしたコンフリクトの内実を見定めるような、「趣味」をこえたコミットメントの存在を、（今回の報告以上に）浮かび上がらせることが不可欠ではないかと思われた。

このほかの報告においてミクロな場面での「出会い」に焦点を当てたものとしては、二人目の登壇者である足立氏の報告が該当するだろう。しかもこの足立報告では、異なる文化・他者との「出会い」を、ただコンフリクトとして提示するのではなく、それを再帰的なマネジメントによって克服してゆく可能性に力点を置いていた。対して、三人目の稲津氏による報告は、他者との「出会い」からもたらされる違和を、調査者の自己変容の過程として記述することをめぐる方法論的な問い直しであったといえるだろう。

また、最後の轡田報告は、「地元志向」の若者の意識をめぐり、既存の社会的「包摂」モデルでも「排除」モデルでも捉えられない、地元生活における「ぎりぎり」のリアリティが取り出されていて興味深かった。

②

さて、ここで見てきたように、それぞれの論者は、グローバル化からもたらされた帰結に対してアプローチを試みてはいるものの、それらは互いに射程を異にしたものであると考えられる（それぞれの論者の位置を大きな観点から見た場合ということでは、コメンテーターの塩原氏のマッピングが上手く整理されていた）。どの論者がもっとも的確にテーマに迫っていたかを答えることは今の私にはできないし、それをする意味もないと思われる。ただ、一つ残念だったのは、登壇した論者同士の意見交換があまり聞かれなかったことである。というのも、今回ともかくも一つのテーマに基づいてそれぞれの論者の発表が行われたわけであり、聴いている側としては、論者それぞれの個性が際立っていた点が印象的だった。そして、その中に意見の相違や見解の違いが生じるきっかけとなる部分がいくつもあったように思われたからである。たとえば、二人目の登壇者である足立氏のアイデンティティ・マネジメントの話と、三人目の稲津氏の調査者の自己変容の議論の間には、対象を観察する中で見出される再帰的認識／対象に向かい合う中での観察者自身の再帰的認識という違いはあるものの、こうした差異を互いに付き合わせるなかに有益な視野の広がりが期待できたのではないかと思われる。

（2）

私が参加したもう一つの部会は「音楽と映画（文化・社会意識（２））」である。本来の報告予定では音楽関連が三名＋映画一名であったが、実際に報告が行われたのは、音が音楽に成る

現象学的・認識論的基準を問い直す第一報告と、ウッドスットック音楽祭の歴史的・社会的意味に関する世代間の認識の差を取り上げた第二報告、そして映画『ゴッドファーザー』を題材に「社会美学」の方法に基づく認識を探求する第三報告のみであった。このようにそれぞれの報告の主旨を並べるだけでもわかるように、それぞれの報告は対象が独特であり、かつ研究方法もそれぞれ異なるため、フロアには若干の混乱が広がっている様子がうかがえた。実際フロアからの質問は、「なぜその題材・方法を選んだのか」「どのような方向性をねらった研究なのか」といった基礎的（あるいは原理的）な質問に時間が割かれた。それぞれの研究は、社会学の中で大きく区分けするなら、「文化社会学」に該当すると思われる。今回の部会においても、この研究分野における研究対象・方法のよい意味での多様性が示されたといえるが、翻っては研究者間のコンセンサスの不足・得難さが露呈したものともいえる。

１．　山森宙史

２．

（1）

①

今回の若手企画テーマ部会「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」において各発表者より報告された野宿者、移民、オタク、若者に関する研究成果は、現在社会学に携わる者にとって不可避な領域である。グローバリゼーションの世界的な拡大・浸透は社会におけるヒト・カネ・モノの流動性を高め、その成員である個人もまた自身が帰属する社会の中で絶え間なきアイデンティティの更新を迫られることになる。このような現代社会における再帰性の高まりが社会学において指摘されて久しいが、その研究成果の多くが社会の中のマジョリティを分析対象とし、マイノリティは当該社会に埋め込まれた存在として描き続けてきた。換言するならば、グローバリゼーションという画一的な概念に抗するためにローカリゼーションという対立概念を設けられる時、マイノリティはローカリゼーションという概念を駆動するために動員されていたということだ。そのため、マイノリティにおける流動性の高まりについては捨象される傾向が強い。

こうした研究情勢の中で、今回の報告において各発表者が提示した「移動・定住」という視座に立ったマイノリティへのアプローチは大変示唆に富むものである。流動性が高まった現代社会において移動を余儀なくされるのはマジョリティだけでなく、マイノリティにも及ぶのは必然である。それゆえに、マイノリティをローカルに埋め込まれるだけの存在として固定化することはもはや困難であり、マジョリティとマイノリティが邂逅する日常とその場の複雑性を捉えるための理論的発展が社会学の中に要求される。

そのうえで、今回の五人の発表者が報告した内容は大きく三つの論点を私たちに提示していた。一つ目は、山北氏・安達氏によって提起された「移動の中でアイデンティティを形成する個人との対話」である。野宿者もムスリムも流動化する当該社会の中では日常生活における遭遇を避けることはできない。その際、各個人が求められる再帰的なマネージメントとは何かを考える契機をこれらの研究対象は私たちに突きつける。二つ目は、谷村氏・轡田氏によって提起された「移動可能性の高まる中で定住を余儀なくされる個人や、流動性の高まる地域社会への眼差し」である。グローバリゼーションによる移動可能性の高まりは逆説的なローカリゼーションの変容をしばしば伴う。それゆえに「オタク」や「地元志向者」への分析視座もかつての都市との二項対立図式ではない新たな研究枠組を提起する必要がある。三つ目は、稲津氏によって提起された「移動・定住への研究視座から汲み取られる方法論的発展の可能性」である。それまでのマイノリティの属性のみに立脚した調査方法は先に批判したローカリゼーションに埋め込まれた存在という観念を再生産してしまう。ゆえに、移動・定住という成員の日常性に焦点を当てるということは既存の方法論を更新していく可能性を秘めている。

以上のように、今回の若手企画テーマ部会において発表された報告はいずれも今後の社会学

の発展を考えるうえでも重要な含意を含んでいると思われる。だが、あえて批判を提起するのであれば、グローバリゼーション／ローカリゼーションという理論図式へのラディカルな挑戦が見てみたかった。グローバリゼーションの浸透は確かに社会の流動性を上昇させるが、各個人が経験する日常生活において「グローバリゼーション」という概念は必ずしも前景化するとは限らないのではないだろうか。むしろ「グローバリゼーション」という図への還元によって、研究対象が抱えているより構造的な問題を見過ごしてしまう可能性も否定できない。つまり、地（フィールド）へのより深い参与は否定されるものではないが、その結果帰結する説明が果たしてマイノリティ／マジョリティ、グローバル／ローカルという「定型」へと収斂する必要は必ずしも無いと筆者は考えた。

②

部会全体の進行や形式面については概ね問題は無かったと思われるが、気付いた点をいくつか述べたい。一つ目は各発表者の時間厳守について。発表者ひとりひとりに研究の思い入れや補足説明があるのは分かるが、短時間で思考を縮減することも学会報告の意義ではないだろうか。「独話」的な報告はオーディエンス側にとっての生産性を必ずしも高めない。むしろ報告者の見解は各オーディエンスとの「対話」の中において表明して頂きたかった。二つ目はレジュメについて。報告者全員が決められたお題のもとに話し合いを設けて企画を進行していたのだから、レジュメは一冊のまとまった冊子形式で配布してもよかったのではないだろうか。

（2）

一日目の 13：40 分から行われたジェンダー（性・ジェンダー（2））部会について。現在ではメディア論や文化社会学においてジェンダーの視点を組み込むことは自明となっている。だがその際、フェミニズム的なアプローチはメディア・文化をいかにして描き出すのであろうか。この問いに対して示唆に富む議論を提起していたのが、「買わずに自分で作ることの文化社会学—ジェンダーの視点からみた日曜大工と DIY」と「宝塚歌劇団における連帯の論理—「女同士の連帯」の言語ゲームによる分析—」の二つの報告である。

消費社会の進展によりただ商品を購入するだけではない消費スタイルとして登場した DIY 商品だが、この消費文化に対する議論はこれまで主体の能動性という次元において展開されてきた。だが、本報告では日曜大工という家庭生活の中において男性によって営まれることの多い対象に即しながら、それがいかに家庭機能の外部化の中で失われた男性の役割を復権するうえで用いられていたのかが論じられる。資本主義社会における個人の疎外に焦点を当ててきたこれまでの消費社会論において家庭生活は見過ごされることが多かった。DIY 商品というポスト消費社会的な文化を考えていくうえでも重要な視座を提起していたと思われる。

「やおい」や「ＢＬ」などと並んでホモソーシャル概念の分析対象として検討されることの多い宝塚歌劇団だが、その多くがファン活動に焦点を当てた質的調査に偏る傾向は否定できない。そのような中、報告者は言語ゲーム概念を援用することで宝塚歌劇団の魅力であるホモソ

ーシャル空間に内在した矛盾を論理的に明証しようとする。このような論理モデルの構築を対象内在的に導出しようとする試みは、単純なフィールド至上主義に陥りかねない現在の文化社会学においてより評価されるべきものだと考えられる。

１．　傲　登

２．

（1）

①

派遣された若手企画テーマ部会「グローバリゼーションと移動･定住のフロンティアの現在」に参加し、5 人の報告を聞いた。以下の報告に関して疑問に思っている。

東北大学の安達智史さんが報告した「イギリスの若者ムスリムの社会意識―グローバリゼーション、再帰性、アイデンティティ」に関して報告者はムスリムの若者の交友関係は個人化しており、宗教やエスニシティの差異はその交友を防げる要因とはならず、異文化と衝突せずに積極的に解けこんでいると強調しているが、報告者が外国人として、イギリスで生活しているムスリムに関して調査すること自体が局限性を持っている。私の知っている限りではムスリムの中でも開放的なムスリムと保守的なムスリムがある。イギリスに生活しているムスリムはどうだろうか。イギリスの社会に溶け込んでいるということは、これらのムスリムは開放的なムスリムであると言えるだろう。そして、報告者のインタビューに積極的に応対してくれることは被調査者が積極的にイギリス社会に溶け込んでいる開放的なムスリムであるのではないか。つまり、極端的な民族意識とアイデンティティを持つ者ではないということである。イギリスの社会に溶け込んでいるムスリムの若者たちは他者に対して（イギリス人、報告者を含む同じようなムスリムではないもの）自分がイギリスの社会に慣れない、違和感を持ち、他民族の文化を極力に拒んでいることを言えるのだろうか。つまり、報告者は同じようなムスリムの若者であれば、結果はどうなるのだろうかという疑問を持っている。同じムスリムでも同じエスニック集団の者に対する発言と他者に対する発言は違うと思う。いくら民主主義が進んだイギリスであっても、ムスリムとしての「自己主張」するのが許されないのではないかと思う。特に 9.11 以降の状況の中ではむしろ困難になっている。強力な「自己主張」はむしろ「テロリスト」のレッテル貼られてしまう恐れがある。

グローバリゼーションの流れの中で、人、物の移動、文化の交流によって、エスニックグループの自己アイデンティティはむしろ世界的背景、社会的構造のもとで再構築され、時代背景にあったエスニック文化として変化している。これはグローバリゼーションによって他文化と衝突せずに、自己文化を保有するには有利であるから。その意味でエスニック文化は構造されたものであり、自己を存続されるための手段でもあるといえるだろう。

②

今回の第 83 回日本社会学会大会「若手企画テーマ部会」1 ―グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在を聞いて、部会の進行形式について改善点は以下の二点である。

第一、パワーポイントに関して。限られた時間内に多くの発表者がいるときは各自報告内容が聞き手にわかりやすく説明するためにはわかりやすいパワーポイントを使用する必要があ

る。部会 1 は 2 時間の間に 5 人の報告者がいる。そのうち、二人の報告者がパワーポイントを準備していなかった。二人の報告はとても面白かったが、もし、パワーポイントを準備していれば、もっと聞き手にわかりやすくなるのではないかと思う。パワーポイントを作っても一枚のスライドにぎっしりと文字が書かれていて、大きな教室の後ろに座っている方にはほとんどなにが書かれているか見えなかったのではないかと思う。他のところでは、同じように一枚のスライドにたくさんの文字が書かれている場合は重要なところの色を変えながら、わかりやすく標示して、パワーポイントの資料を配布していた。そうすることによって、見えないところがあっても、手元の資料でカバーできるので、とてもわかりやすくなっていた。

第二に、報告者が制限されている時間以内に報告内容を納めることが必要である。報告者が時間以内に報告することができなかったことによって、コメンテーターの時間、質疑応答、議論の時間がなくなった。せっかく面白みのある研究成果は議論できずに終えてしまった。もちろん、報告者を中断することができないかもしれないが、人数が多い場合は、報告者が制限された時間以内に報告を終えることができないことを事前に想定しながら、あえて、報告する時間を短くすることによって、予定していた時間以内に質疑応答、議論できるように工夫すれば、どうだろうか。

以上の二点が次年度以降の「若手企画テーマ部会」に役に立てれば幸いだ。

（2）

若手企画テーマ部会—グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在以外に 11/6 午後の「水環境とダム」の報告を聞いた。この部会に前の報告者 3 人が同じ大垣市の「水環境の再構築」というテーマに関して報告した。第一の報告者は大垣市の水環境の全体像を報告し、二人目の報告者は大垣市の船町を事例にして、三人目の報告者は十六町の事例を紹介した。この三つのテーマは人々の生活から遠ざかっていた水環境が再び「近い水」になるプロセスの中で、各地域はどのようにして水環境を再構築しているかについて報告された。船町は全国と同じように「原水都→水都衰退→水都再生」の水環境の再構築は「環境のための再構築」ではなくて「地域のための水環境再構築」である。しかし三人目の焦点当てた十六町は古くから伝えられてきた輪中によって、水害を食い止めることができた。十六町の報告に関して会場からは「十六町が伝統的な輪中によって水害を食い止めることができているならば、それは再構築にならないのではないか」という質問があった。これに関して、報告者は「ここでいう再構築は相対的な再構築である」と説明した。全国的に水都の衰退によって、人と水のかかわりが薄くなっている状況の中で十六町は古くから伝われてきた水利用を守っていることが確かに不変であるように見えるが、人と水のかかわりが低下している現状、水環境に対する関心が低下している現状と相対的にいえばそれは再構築であることがいえると説明した。この様な不変であることが「再構築」であることはとても斬新な視点であると思う。

１．　金　太宇

２．

（1）

①

今回の若手テーマ部会はグローバリゼーションに伴う移動や定住の現在が議題である。グローバルな動きは、いわゆる文化現象にとどまらず、経済思想や経済体制、政治思想や政治体制、人権・平等に関する社会思想や社会制度などを含んだ領域について展開されている。世界経済のグローバル化は多くの恩恵をもたらすと同時に、様々な問題もわれわれに突きつけている。グローバル化が引き起こす世界規模の競争激化が、勝者と敗者を作りだし、先進国と開発途上国との間だけでなく先進諸国内でも貧富の格差を拡大させ、いわゆる二極化現象を引き起こし、文化摩擦や貧困問題を生み出している。このように、我々はグローバル化のメリットとデメリットの両側面を認識し、バランスシートで考えなければならない。その上でデメリットをいかに極小化するか、具体的に個別問題を検討することが重要となっている。今回のテーマ部会はまさにこのような背景を踏まえて、様々な事例報告を通してグローバリゼーションに伴う移動や定住の現状に注目し、流動によって生じる人々の出会いや摩擦などの諸問題を我々に考えさせるのが目的であろう。

「イギリスの若者ムスリムの社会意識」の報告でイギリスの若者ムスリムが宗教と文化を区別し、自らのアイティンティティを保持しながら移住先のイギリス社会にいかに溶け込もうとする戦略的な側面が見られる。若者ムスリムはイギリス社会で異文化との対立や排除ではなく、両立や受容への社会意識の変化が生じていると報告されたが、このような社会意識の変容は若者ムスリムの共通認識ととらえることができるのかという疑問がある。若者ムスリムによるテロ未遂事件などからもわかるように、ムスリム社会とイギリス社会の文化や伝統との対立や衝突がまだ根強く存在しているのも事実である。若者ムスリムの社会意識の変化は自発的なものではなく、イギリス社会の排除や圧力に強く影響され受動的なものであると考えられる。イギリスの若者ムスリムの社会意識をより正確にとらえるためには、若者ムスリムの社会意識の変化を引き起こした外在的原因と内在的原因を両側面からさらに追及する必要がある。

「野宿者の移動と定住」、「ネットコミュニティと地域コミュニティが交差する場」の報告で、出会いによって新たなコミュニティが形成され地域の変化をもたらしたことは、かつての定住の社会的枠組を超えた、新たな紐帯にもとづく秩序の形成、統合の可能性という試練に直面していることを意味している。野宿者やアニメファンの移動や定住によって地域の変化をもたらしているが、彼らに対する我々の認識はまだ低いものである。報告で野宿者が住み場所を暴力的に通行人に見せている側面があるのではないかという議論があった。野宿者の住み場所が「暴力的に見せる」という側面があるかもしれないが、それよりも我々が野宿者を暴力的に見ているため、そのように思ってしまうのではないか。「暴力的に見せる」という側面があるとしたら、最も排除の的となる可能性が高い住み場所を、あえて暴力的にみせる彼らの動機や原

因を考察するのも非常に意義があることだと思う。

②

5 人の発表者の発表内容はそれぞれ特徴的なものでありながらも「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」のテーマに沿って展開されていた。それぞれの発表内容についてコメンテータである二人の先生が適切に概括し、議論を呼びかけ、発表者も適切に応答することができたと思う。しかし、部会の全体的な進行からもわかるように予定されていた時間通りに部会の進行ができず、部会参加者に質疑応答の時間を与えることができなかったのは少し残念である。若手のテーマ部会であるのならば、あまり形式に拘らずに自由な意見交換や議論などを活発に行うべきであると考える。部会参加者の率直な疑問や評価などは発表者の新たな問題意識の創出や自己検証の啓発にも繋がるので、質疑応答の時間をどのように確保されていくのかは今後の課題であると思う。

そして、発表者に 10 分だけの発表時間を与えるのは少しきつかったのではないかと思う。最初から 15 分ぐらいに設定しておけば、発表内容をより十分に伝えることができたかもしれない。もちろん部会が総合的な時間的制限があってやむを得ずに 10 分という時間を設定したと思うが、結果的に発表者のほとんどが発表内容を制限時間内に収めることができなかったのは事実であり、今後の部会の開催においては発表者の時間をもう少し配慮した方がいいと思う。限られた時間で発表者や部会参加者に十分な時間を確保させるのは容易なことではないが、事前に発表者と部会進行について意見交換を行い、色々工夫をすれば不可能でもないと考える。

(2)

日本社会学会の二日間の報告で自分の研究テーマと直接に関連する研究報告はなかったものの、ほかの研究者の報告は興味深いものであった。若手部会のほかに最初に参加したのは「公共圏と親密圏」の部会であるが、この部会は民主的エートス論を中心に市民的公共圏の可能性の条件を実生活との関連で考えることで、人々が民主的な意見形成・意志形成に参加するのは、いかなる生活条件の下に置いているのか、という問いに改めて議論する形で展開されていた。次に参加したのは「水環境とダム」の部会であるが、名古屋大学の研究者を中心に、水環境の再構築というテーマで事例研究の報告が行われた。都市の水環境とその再構築を研究する基本的な視座として、治水・利水・環境の一体性と水秩序システムの重層性に注目し、都市から遠ざかっていった水環境が再び「近い水」になる可能性はどこにあるのかという問題関心のもとで展開された。大垣市の三つの事例から、水環境が都市づくりに題材を提供する一方、都市づくりのなかで水環境の意味が再発見され、再構築され、行政や市民による水環境の都市づくりへの埋め込みを通して、再び都市にとって「近い水」が戻ってくる可能性が見られた。

そして、参加したもう一つの「リスクと社会の境界」の部会では、テクノサイエンスは市民のリスク認知にどのように影響を及ぼすのか、テクノサイエンスにどう向き合うかが大きな議題であった。近年の遺伝子科学の発展に関わる社会的リスクを事例として、現代の医療技術が

もたらすマクロで長期的なリスクに対して既存のアプローチへの検討、メディアを経由して構築された身体と技術の関係性に対するフィクショナルな言説が、人々の身体観を操作し、リアルな身体に影響することになるのではないかの議論、風力発電に対する懸念と反対運動を対象とし、リスク問題における情報の不確実性の連鎖という構造が存在しているとの報告が印象に残ったものであった。

１．　濱田武士

２．

（1）

①

グローバリゼーションという視座から社会現象をとらえた場合に、対象とする事例が、生成・展開・結果というプロセスのどの時点に位置しているか、つまり時間軸上のどこに位置しているかが問われる。また移動・定住という視座から社会現象をとらえた場合に、空間軸上のどこに位置しているかが問われる。こうした時間軸と空間軸の関係から「フロンティアの現在」をテーマとした企画部会は、現在進行形の事例を対象とし、「現在・定住」「過去・定住」「現在・移動」「過去・移動」という四象限を立ち上げていたと考えた。各報告の対象はその中のひとつ、あるいはふたつの象限に位置づけられ、これとは異なる象限に位置する事例や観点を用いて、現在をとらえなおし、今後の検討の材料としていた、と読み取れた。

山北報告は、現在における野宿者の移動と定住を取り巻く状況がいかに困難な状況にあるのかを検討した。これにたいし、かつて大阪市長居公園の野宿者が自身が育てた野菜を売り、市民が買うという事例から交流の場の生成をとらえ、今日に向けたひとつの指針とした。では、過去にそれを行った野宿者は現在も同じようなことを行っているのか、また野菜を育てるような場を設けることで今日においてもまた交流が生まれるのか、という点に関心を持った。

安達報告は、イギリスの若者ムスリムが、取り巻く社会状況との相互作用から、宗教と文化を区別し使い分ける実践をし、「現在・定住」に位置を占めている姿を明らかにするものだった。こうした研究は、ホスト社会側の人びとにとって異なる宗教・文化をもった人びとをとらえなおす知として応用可能であり、また今日における特定のイスラームのイメージを相対化することにもつながるものだった。では、「過去・定住」という次元におけるイスラームがホスト社会でどのような意識を持っていたのかという点や、若者ムスリムの「現在・定住」は本人が実際に移動の経験のあるのか、ないのかを研究者が明らかにすることが、現在の実践を検討する上で、新たな発見が可能なのかという点に関心を持った。

稲津報告は、本来は定住する境遇にある研究者自身が、過去から現在へと移動し続ける人びとの日常をとらえようとする場合に、自身が向き合わざるを得ない空間軸の違いを基にした非対称の関係性どう乗り越えればよいかを議論した。これについて、たとえ定住する境遇にあったとしても、過去にさかのぼり現在へ遡及しながら自身の経験をとらえなおすことが、空間軸を異にする対象を検討するうえで有用なのではないかという方法の提案だった。では、たとえば民俗学ではなく、社会学がこうした研究を行うことの意義や狙いはどのような点なのかに関心を持った。

②

「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」というテーマは、「グローバ

リゼーション」という現代社会状況と「移動・定住」という身体、といった明快で広範囲に及び、どんな研究者でも自身の研究に引きつけて考えることができるものであるように見受けられた。

企画部会であることからなのか、コメンテーター・司会は報告されたものをさらに前進させようとする姿勢がうかがえた。このようなテーマであるがゆえに、仮にフロアが意見・質問・コメントをする時間が確保することができれば、報告者にとってさらに有益な場になったかと思う。こうした観点から形式について一つの提案をしたい。

報告がたとえ途中であっても持ち時間が終了すればそれで止めてもらう。そしてそれまでの報告をもとに、コメンテーターから見解、全体の見取り図、質問をもらう。その後、フロアからの質問やコメントをもらう。こうしていくつか質問をもらっている間に報告者は端的なこたえを用意する時間がとれるようになるかと思う。

そして報告者は質問に回答するが、報告が途中で終わってしまい、質問があまり出なくなるという結果に至ったとしても、内容を再び述べる時間は設けないことにする。これが終われば全体討議をする。以上すべてを、時間を設定して行う。

企画部会が一般部会の目指すところとそもそも同じなのか違うのかはわからないが、目指すところを設定できる部会であればこそ、それがどの程度達成されたのかについて検討することも可能である気がした。

（2）

部会でジャンル分けはされているものの、専門的な学会ではなく、日本社会学会であることから、フロアには様々な分野の研究者が参加するので、事例紹介を前面に押し出すというよりも、仮説や理論などの面とバランスを取りながらプレゼンテーションすることが、分野を異にすることを乗り越え、様々なフィードバックを得ることにつながると考えられた。

戦争の記憶・記録の部会に参加したが、たとえばルポルタージュ・雑誌記事・新聞記事など多くの資料を用い分類をおこない 1970 年代以降の「慰安婦」表象を分析した木下報告は、十分な裏付けに基づき結論を導き出したものだった。たしかに、このような事例を扱い行った仕事そのこと自体は多くの時間を費やしまとめたもので評価できるものの、この成果を社会学一般の文脈において仮説を打ち出すことにより、今後の研究の示唆が得られるような質問やコメントが部会参加者から発せられたように思った。このような観点からすると、戦争とアニメーションの関連について報告した雪村報告は、自身が報告の冒頭で博士論文を提出したことを明らかにしたように、事例のみならず理論面での検討をすでに終えた地点からの内容であったがゆえに、他の報告とは一線を画すものだった。したがって多くの質問やコメントが発せられ、また研究がどういった水準まで行けばよいかの指針となり、大変参考になった。

１．　松村　淳

２．

（1）

①

ここでは山北発表について、自分の見解を論じてみたい。山北氏はまず、無音の一分間の映像を見せ、そこでバーベキューや少年野球が行われている空間のすぐ隣に野宿者がいることを表象するブルーシートが張られている場面を流す。

現在、野宿者は街の浄化政策の中で都市の地下道やガード下、あるいは公園からは一掃されてしまった。このことは、現代の都市において、排除と包摂の二項対立のメカニズムが確実に作動していることを最も分かりやすい形で具現化している事例であろう。しかし、山北氏の発表していた事例は、バーベキューと野宿者、少年野球と野宿者が同じ空間を占めている事例である。ともに河川敷という空間であったが、そこはまだ排除と包摂という二項対立メカニズムによって覆い尽くされていない空間である。たとえば公園はもうそのようなメカニズムによって覆い尽くされている。公園の入り口にはかなりの数に上る注意書きが列挙されていることから分かるように、「正当な」利用者ですら利用に気を使う。その公園が定義する使用方法を逸脱する使い方はできない。現在の都市空間は、ある空間には単一の機能が割り当てられている。その機能を逸脱する方法で空間を利用すると取り締まりの対象になるのだ。

冒頭の映像で登場した河川敷はかろうじて残った「無記名の空間」つまり機能が厳密に与えられていない空間である。冒頭の映像はそれを雄弁に物語っている。

あるいは、野宿者の野宿という行為がその場所を無記名の空間へと変容させていると述べることもできよう。

ただ、山北発表に対するコメントとして、五十嵐泰正氏が、そこを領有している様子を、使ったり通ったりする人間は半ば強制的に（暴力的に）見せられてしまうという点を指摘していたように、いずれ野宿者のブルーシートは歩行者や利用者の目につかない場所に隠匿される、つまりそこから排除される運命にあるのだろう。

②

五人の発表者の研究発表と、二人のコメンテーターによるコメント、そして総括のコメントとフロアに開いた質疑応答を限られた時間の中で展開しようとするとき、最も大切なのがタイムマネジメントであると思う。一番目の山北さんが「一分間を贅沢に使って映像をお見せします」とおっしゃっていたが、その言葉は限られた時間の中で一分間がどれほど重要な時間であるかについて、山北さんが強く理解していることの証左であったと思う。他の発表者の方が発表に熱が入るあまり、時間枠というもの重要性を失念してしまったのではないかと思う。10 分なら 10 分に収まるように編集して発表することが最低限のマナーであると思う。川端さんのコメントも聞きたかったですし、フロアとの応答もみたかったです。（自分が参加すること

も含めて）

ただ、他の部会の発表と比較すると、この部会の報告者の発表は声の大きさや発表方法も含めて、とても理解しやすかった。

（2）

宮原ゼミ OB の藤坂氏の発表を聞くためにメディア、芸術の部会に参加した。藤坂氏は宮原先生の提唱する社会美学という概念を使い「テーブルの社会美学」という発表を行った。藤坂氏は映画『ゴッドファーザー』を題材にしている。『ゴッドファーザー』では頻繁にファミリーが巨大なテーブルを囲んで食事をする場面が出てくる。藤坂氏は、テーブルを囲んで生起するファミリー間の会話や身ぶり手ぶりなどの全てを「社会美」と呼んで分析の対象としている。しかしながら、質疑応答では「社会美」というものを自明の概念のように用いることについての異論が聞かれた。たしかに現場に居合わせた宮原ゼミのメンバー以外の人には「社会美」とは全く馴染みのない言葉であり、それをあまり定義せずに発表を行っていた事に対する違和感がむしろ共有されていたという皮肉な結果であった。　他の発表者も芸術という部会特有のものなのか、議論をするための共通前提を探すことに終始し、あまり生産的な議論にはなっていなかった。議論が生産的になるか否かは、割り当てられる部会のメンバーによって変わってくるということがよくわかった。

１．　中川　加奈子

２．

（1）

①

５つの報告すべてを通して、グローバリゼーションが、ローカル社会にいかに現れているか、可視化されているかが、論点になっていた。その点で、どちらかといえば、「グローバル化と他者・情報・文化の越境のフロンティア」のようなタイトルにまとめられるものが多く、移動・定住というタイトルにはマッチしない報告もあったと思う。とはいえ、タイトルのミスマッチが気にならないほどに、議論は興味深かった。

山北報告では、政策との関係ではかられる存在でしかない野宿者が、定住をめぐる支援運動とその帰結に対峙するなかで浮かびあがる問題を検討することで、運動と生活の連続性／非連続性を明らかにしようという試みだった。ただ、短い報告時間という制約もあって、行政にデザインされっぱなしで、行政の意図するカテゴリに押し込められてばかりいる野宿者像しか見えてこなかった。野宿者が、地域に根付くことがいかにして可能であるのか、社会の流動性や、文化、情報の越境がどのようにして可能になるのか、おそらく発表者はすでにフィールドから見出しているように感じるので、その点をまた報告してもらいたいと感じる。

稲津報告は、フィールドがそのものどこにあるのかというもの。フィールドの「いま・ここ」に時間・空間を超えてあらわれる「空間の監視者」の影響についての報告者の論文（稲津 2010）も目を通したが、同論文で論じられているような複雑化する現在の社会状況を考慮すると、それをとらえるための視座の問い直しは、多くのフィールドワーカーも向き合っているものであり、切実な問いであったと思う。報告後の議論の中で、コーエンの「差異は資源になる」という論点が挙がっていたが、同論文で論じられた空間の監視者の視点の「転移」ではなく、積極的な意味づけに「反転」する契機はないか、それをとらえる視点は何かを考えることも必要だと思う。そのためには、視座だけでなく、解釈の次元でのもう一段の構えも加えた、二段構えでの議論が必要であったのではないかと感じる。これらの構えは、差別問題など、さまざまな問題に通底する構えとなるので、引き続き議論していきたい論点である。

谷村報告では、これまでの地域活性化としての地域資源の活用の事例とは異なり、アニメ聖地では、ファン自身が資源を作り出している側面、つまり、ゲスト側が地域資源をつくる自給自足型の側面があることを指摘していた。インターネットなどを媒介とした新たなネットワークが形成される中で、旧来の地域社会と外部とのホスト／ゲスト関係を超えるような、新たな関係性の兆しが感じられた。とはいえ、事例分析や事例自体はとても面白いものの、その中に埋没している印象を受けた。部会の共通テーマにどう貢献するのか、とくにネット社会と地域という物理的な空間を超えた連帯の持つ可能性や、アニメオタクという集団の属性などを、どのように解釈するのか、理論的な洗練が望まれる。

安達報告は、グローバル化とアイデンティティ形成の問題を、若者ムスリムの社会意識を事

例に、再帰的近代を背景とした動きであるという解釈のもとで分析したものであった。伝統は前提ではなく選択肢となった中、政府によって作り出されるアイデンティティと、個人がその場その場で生み出す正当化／正統化の論理とのせめぎあいなど、スリリングで面白かったが、先述の枠組みに収斂されがちな解釈にとどまっていたようにも感じる。報告の中で、特に重要であると感じられた「多様性」と「不安」とが結びつく契機などを掘り下げて検討のうえ、より複雑化している社会の在り方を描く構えを見せてほしい。

轡田報告は、グローバル化とローカル化の進行と、そのなかでのローカルのアイデンティティ構築、なかでもぎりぎりのところで、社会のマジョリティであると位置づけなおす様相を、「地元志向」の若者たちに焦点を当てて明らかにしたものであった。果たして、グローバリゼーションに伴い、空間的な移動傾向と階層的な移動傾向が一致しなくなった理由は、中央／地方の権力関係に収れんされてしまうものなのか。報告内容は大変リアルなものであったが、その先には何を見出せるのか。単純な階層の再生産のメカニズムであるという解釈に落ち着いてしまうのかどうか、事例から見通せる社会構造について、もう少し踏み込んだ議論をきいてみたかった。

また、コメンテーターである塩原氏のコメントの中で、階層移動は、中間層で頻繁におこなわれるが、最上部・下層部ではあまり行われないという傾向や、この傾向の中での研究者の位置づけについて視点は面白かった。しかしながら、空間移動と階層移動のつながりはやはり一緒のものではないであろうし、階層最下層であるがゆえに空間的に移動・越境をくりかえす存在をどうとらえるのかなどの議論が残っている。他者・文化・情報の越境と階層のフロンティアを次のテーマとして追求していくのが面白いのではないだろうか。

②

やはり、フロアディスカッションの時間がなかったのは残念であった。個々の発表やコメンテーターからの指摘はとても興味深かったし、これらを受けて、さまざまな論点を想起している参加者も多かったと思う。コメンテーターへの発表者のリプライの前に、フロアからの意見を聞いたのち、双方を合わせた形で発表者がリプライをする、という形をとって、フロアからの意見を聞く時間を確保しておけばよかったのではないかと思う。また、発表者が 5 人というのは、少し多すぎたのではないか。十分深まった議論にするためには、多くても 4 人程度の発表で、最低一人 15 分程度の発表時間を確保しておくほうがよかったと思う。

また、部会自体はとても興味深くて、いくつか論点も挙がったので、今後は、この一回の部会だけの一過性のものとして終わらせるのではなく、同様のテーマでの学内研究会や他学会での発表など、継続的なものにつなげてほしいと思う。これに関連して、今回派遣された院生・研究員たちが、部会での議論をせっかく共有しているので、同様のテーマでのフォローアップが望ましいと思う。なお、気付いた点としては、派遣前に、学内研究会などで、派遣予定研究員・院生たちが事前にテーマについて理解を深める機会があってもよかったと思う。

登壇者が学外研究者も含んだ形で多様となっており、学内にとどまらない、開放的な雰囲気

での部会となっていた。この雰囲気は、今後もぜひ維持してほしいと思う。

（2）

今回は、ほかに「引きこもり」部会、「グローバリゼーションと都市変容」部会、「戦争・記憶」部会等に出入りした。中でも、シンポジウムの「社会学と時間」は興味深かった。
最初の発表者である片桐氏は、バウマンの「リキッド・モダニティ」論を援用しつつ、ライフヒストリーが、これまでの確固としたストーリーをもった「アルバム型」から、個々の断片的な場面で構成される「エピソード型」に変容しつつあることを指摘している。

続いて、山田氏は、薬害エイズ問題でのフィールドワークから、調査者のたついち、中でも、「ドミナント・ストーリー」にある程度影響を受けた調査者が、対象者と関係を築きつつ、生きられた経験を描いてく経緯についての報告であった。

大久保氏は、清水幾太郎の生涯から、社会学者が生きた時間はどのようなものであったのかを検討している。中でも、40 代という比較的人生の早い段階で清水が記述した自分史についての焦点を当てている。

最後に、小川氏は、社会学者が学問としてどのように時間をとらえられるのかについて、スリリングな理論を展開した。個人として言っていることと、やっていることがずれているものの、「二重らせん構造」を描いて、最終的には一致してしまう、という独自の視点を展開していた。

社会学には、「いま・ここ」の構築過程をとらえる過去志向型と、近代化論・マルクス主義の影響をうけた未来志向型の二つの類型がみられる。今回の学会では、「ライフヒストリー」「記憶」「歴史」に関する部会が多くを占めており、社会学は、21 世紀を迎えて、過去をとらえなおす時期にきていると感じられた。

一人当たり２５分の報告時間があり、社会学の今の到達点と、今後の展開を考える上で。踏み込んだ議論がなされていたと思う。時間観というよりは、時間の経験をどのように表象していくのか、心理学・文化人類学・歴史学など、近接分野の中で、社会学のオリジナリティを考える上で、現在の到達点と課題を見直すシンポジウムとなったのではないかと思う。

１．　松本　隆志

２．

（1）

①

原地人の理論は、われわれの諸カテゴリーとわれわれの諸問題から出発して仕立て上げられた理論にくらべて、現地の現実とよほど直接的な関係にあるからである。

当事者の信じるものは、彼らが思考すること、あるいは為すことは、たいそう隔たっているのがつねだからである。原地人の考え方をとりだしたあとで、客観的批判によってそれを還元しなければならない。この批判が、その底に潜む事象への到達を可能にするのだ。

上記二段の引用はレヴィ＝ストロースのもの（「マルセル・モース論文への序文」）であり、ここで提起されている問題を端的に言えば、当事者の言葉をどう扱うべきかという問題である。それを無視するのは論外なのだが、それを鵜呑みにするだけも論外で、これらはある程度は観察者（研究者）の側で批判的に捉えなければならないということである。かなり前ふりが長くなってしまったが、**稲津報告**が問うていたのはこの両義性である――ただ、彼はどちらかと言えば、当事者／観察者の内、前者に傾斜した立場を表明していた。かの報告で提起された問いは、好意的に言えば古くて新しい問題、いけずな言い方をすればもはや言いふるされたことであるが、稲津報告の独自性は、出会う機会の乏しい他者へのフィールドワークの困難さへの言及である。ここでの指摘は、われわれとそうした他者が出会う――われわれにとって彼らが可視化される――のは、祝祭のような非日常的なイベントの場やストリートでの行きずりの出会いに限られがちであり、それゆえ、半ば不可避的に、そうした部分（彼らの日常性や生活実践には関わりのない部分！）のみに焦点が当てられがちとなり、実態とはかけ離れたステレオタイプが形成されやすいということである。稲津の言葉を借りれば「フィールド」（→調査対象の生活実践の場）は「可視的」な所に限定されはしないである。なお、かの報告は、グローバリゼーションという状況下、国境を越えて移動する人々を念頭に置いてなされたものであるが、非行・いじめといった子供社会の暴力を研究対象としている評者にも、稲津のこの指摘には頷かざるをえない。というのも、逸脱研究の名著の誉れの高い、佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー』においても取り沙汰されていたのは、彼らがどんな改造車に乗って、どんなファッションをしているのか（→可視化された部分）ばかりであり、非行やいじめを扱ったルポルタージュでは当然のように指摘されている“ヤキ入れ”“カンパ”“上納金”といった暴力（→不可視）については全く触れられていないからである。ただ、研究者個人が衝撃的と感じた事例ばかり並べてもフィールドワークにはならないという稲津の主張に賛意を表する一方で、“では、どうすべきか？”という違和感を感じたのも事実である。というのも、フィールド調査に限らず、何がしかの現象を分析するにおいて、どれが重要な出来事で、逆にどれが瑣末的なものなのか

を弁別するのは至難の業であり、膨大な量的データを目の前にして、どれもが重要な構成要素であるといっているようでは、その量に圧倒されてお手上げ状態になること必定である。となれば、自分の方からあるトピック（問題）を設定し、分析をその部分に特化するくらいの強引さが必要であると考えるからである。たとえば、マックス・ウェーバー（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）が資本主義の特徴として問題化したのは労働への強迫的な専心であり、その起源として注目したのがプロテスタンティズムの倫理であり、その中核をなすものとして注目したのが予定説であった。当然「プロテスタンティズムの倫理」と言うべきものは「予定説」だけでなく他にも様々なものがあり、宗教家からしたらデタラメなのかもしれないが、それくらいの強引な仕方をしなければ“分析”という名に値することはできないのではないか。そして、報告で呈示されていた「自己延長的なフィールドワーク」という方法だけで、こうした二律背反的な問題を解消するには至らないのではないかというのが正直な感想である。

出会いの少ない他者の実態を捉えることの困難さを指摘したのが稲津報告であり、さらに、そうした他者との出会いの場となるストリートというもの自体に、人々に非日常的な祝祭的感覚を喚起させやすい――そのせいで、そこで出会う人々の生活実践や日常性にまで関心が至りにくい――という性質が孕まれていることが**山北報告**のレジュメで指摘されていた（『第 83 回日本社会学会大会報告要旨集』p.81）。ただ、報告当日は時間の関係上そこには触れていなかったのが評者には残念でならない。なお、かの報告の冒頭の 1 分間、河川敷という 1 つの空間の中に、野球をしている子供、バーベキューをしている人達、野宿者のテントなどの異質なもの同士が渾然一体となって同居していた映像を流し、この風景（表象）についての問いを発していたが（→公共性の表象か？ それとも儀礼的無関心？）、評者は、これを目にして、ジクムンド・バウマンの「ソリッド・モダニティ」から「リキリッド・モダニティ」への移行という図式を思い起こした。彼によれば、こうした変化の中で、地域社会がコミットメントの対象から儀礼的無関心の場に変化する――コミットメントがあったとしても一時的な祝祭やイベントの時だけ――ということだが、どうだろうか。

ストリートという空間の持つ祝祭性、非日常性――そうした場所を住処とする野宿者の実相を捉えることの困難さ――について論じたのが山北報告であるのに対し、**谷村報告**のアニメキャラによる町興しという事例は、そうしたストリートの性格（一時的な集いの場 → 祝祭性・非日常性）を積極的に利用したと言えるものであろう。もちろん、そうしたものに乗れる人／乗れない人、利得に与れる人／与れない人といったコンフリクトについては指摘されていたが、個人的には、そうしたものを通して“ヤンキー”（→地元に定住する存在）と“オタク”（→観光スポットへと移動する存在）とが連携していたという話には少し感動を覚えた。というのは――移動／定住からは話が逸れるが――それはクラスルームにおいては決してありえない光景だからであり、そこでは、オタクは身分が低く、軽蔑され、おまけに、そこでわがもの顔でふるまうヤンキーたちの暴力の餌食にされることが常だからである。ただ、評者のようにエピソード的な話に情緒的に反応するだけではなく、“誰から見てもポジティブなものはやり尽く

されているので、外部から人を呼び込むためには、コンフリクトを孕むものでも――そうしたものだからこそ――導入しようとするのではないか”という五十嵐氏のコメントにもあったような、全体社会的なまなざし（→消費社会論的パースペクティブ）を保持しながら報告に耳を傾けるべきだろうが…。

稲津報告、山北報告、谷村報告は必ずしもグローバリゼーションという状況に限定されるものではないが、グローバリゼーションを背景にして、これからますます増えるであろう移動する人々の実相を捉えるには、従来型のパースペクティブの変更が迫られるということを現象面から示したものであろう。そして、その点を最も浮き彫りにしようとしたのが**巻田報告**であろう。かの報告が照準するのは若者の地元志向（地元就職・地元消費・地元愛）の高まりである。彼らは、グローバリゼーションの進展に伴う流動性の高まりによって様々なところを活発に渡り歩いてゆくようになるはずの存在であった。そして、こうした状況への評価は「社会排除モデル」「社会包摂モデル」というどちらのパースペクティブを用いるかで全く正反対のものになるということだったが、評者がより重要と思ったのは、従来型の両パースペクティブでは事態を正確に捉えきれないことを指摘した点にある。地元に魅力的なことはないが仕方なしにいるわけでもないという感覚を語る若者。自分の町の魅力を聞かれてファーストフード店が多いことと答える若者。これらの両義性を分析するには別のパースペクティブが待たれるということである。

最後、**安達報告**は、イギリスの若者ムスリムという事例からグローバリゼーションに伴うアイデンティティの多重化について検討したものである。議論の射程は、マクロな社会構造（→グローバリゼーション）だけではなく、そこに規定される中で繰り広げられるミクロな相互行為（→アイデンティティ・ポリティクス）にまで及んでいた。そして、通例、アイデンティティの多重化というと、即、アイデンティティ不安へと結びつけられた議論がなされがち――対象がマイノリティということになるとなおさら――だが、ここで述べられていたのは、イスラムであることとイギリスに住むこととが両立した姿――様々なイデオロギーをすり抜けて、諸規範からあからさまに逸脱しない範囲で、わりかし、やりたい放題している姿――であった。ただ、ここで挙げられた事例は、ムスリムが多く、むしろイギリス白人の方がマリノリティという地域であり、これを一般化することはできないという批判があろう。ただ、こうした批判に対しては、ここで呈示されたものを、単に経験的事実を反映（→一般化）したものとしてではなく、「反事実的想定」（ハーバーマス）としても捉えてみるべきではないかと評者は思う。実際、デュルケム社会学のキーワードの１つである「連帯」とは、当時のフランス社会（第三共和制）の現実の描写ではなく、いまだ革命の混乱収まらず都市でも農村でも個人間の紐帯が弱く極めて不安定な現状に対し、現実にはないがそこに向かわなければならないものを措定して語った到達目標であった。グローバリゼーションの進展を背景にした再帰性の高まりというのが現代社会の趨勢というのなら、今後、自己のガヴァメントという問題はますます重要度を高めてゆくだろうし、となれば、それに対処するための理想モデル（マニュアル）の構築がなされる必要があり、評者には安達報告がその試みであったようにも思える。

以上が、若手企画テーマ部会「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」での各報告についての所感である。なお、部会当日での各報告の順番は、山北→安達→稲津→谷村→轡田の順であり、評者が紹介した順番がそこから逸脱しているのは、それが評者の問題関心から再構成されたものだからである。

②

「改善点」「次年度以降の部会企画の参考に」ということなので、以下では批判点ばかりを書き連ねるが、お許し願いたい。

部会全体ということについてだが、５つの報告は、安達報告を除いては、必ずしも、表題に掲げられていた「グローバル化」というテーマに照準されていなかったように思える。確かに、地方の商店街が軒並み廃れてしまうというのは中国経済の活況によるところも大きく、その意味では、谷村報告（→新奇性を前面に押し出した町興し）は深くそれと関わっていると言えるかもしれない。また、グローバル化の進展による福祉国家の退潮とはよく言われることであり、山北報告（→ストリートに叩き出される野宿者）はそれ抜きには語れないかもしれない。それに日系ペルー人を調査対象としていた稲津報告とは正にグローバル化の産物ではないのか。だが、これらの関わりは――影響力の大きさは無視できないものの――あくまでも間接的なものであり、グローバル化と直結した問いではないように感じた。さらに、グローバル化を背景にした流動性の高まりによる異質な他者との出会い――それを通しての自己の変容――の可能性という論題自体、塩原氏のコメントにもあったように、そもそも、「移動／定住の揺らぎ」という図式で捉えることに意味があるのは、自由に動くことができる層（→コスモポリタン的エリート！）と全く動くことのできない層（→貧困層）との中間にいる人達だけだからであり、特に、山北報告の野宿者とは完全なる後者である。また、轡田報告の地元志向の若者ということについても限りなく後者に近いのではないか（そもそも、こうした図式で語れるものなのか）。確かに、５つの報告が有機的に連関し１つの全体を構成しているというのが理想であり、そうした観点からすれば、本部会を５つともバラバラな内容であったと断ずることもできようが、現実問題、そんなシンポジウムや部会などほとんど稀で、無理にそうしようとしたところで、各報告者の個性を殺してしまうのが常であり、集まれば一番下のレベルが平均となるというジンメル社会学の命題を立証してしまうだけのような気がしてしまうが…。

なお、本部会の締め括りに、司会者の川端氏が「グローバル化／ローカル化」「均質化／個人化」「可視／不可視」といった二項対立図式を立てることで見えなくなる問題は何かという問いをフロア全体に提起していたが、評者はこの辺りに「次年度以降の部会企画の参考」となる鍵があるような気がした。

（2）

以下で述べるのは**「ひきこもりと不登校（社会病理・逸脱（２））」**という部会についての所感である。

全体の印象としては「当事者性」「当事者ニーズ」といった類のマジックワードが氾濫していて、やや食傷気味という感があった。というのは、そもそも全体的な傾向として、そうしたことを主張する前にしておくべき手続き、すなわち、ひきこもっているとはいかなる状態であるのか、いかなる点を問題化したいのかといった議論（→現状把握、対象の絞り込み）がすっかり抜け落ちていたからであり、疎外論的な主張をしいたいわけでは決してない。なお、井出草平氏の報告に限っては、今述べたようなことはなく、いかなる問題意識の下でいかなる対象を論ずるのかという点を明確にしていたが、逆に、そうであるがゆえに、フロアから“概念規定などをしていては、ひきこもりや不登校という現象の多様性がとらえきれない。だから、概念規定などしないほうがよい”という研究者志望としては耳を疑わざるを得ないような反論が出るという始末であった。言うまでもないことなのだが、“かくかくしかじかの概念規定ではかくかくしかじかの問題を取りこぼすので妥当ではない”という批判ならわかるが、概念規定自体が無意味であると言うのなら、もはやそれは“学問”“研究”とは呼べないだろう。

そして、本部会で報告した本学院生の伊藤康貴氏の報告にも、評者が冒頭で述べたような傾向があったことは否めないのだが、ただ、そこで主題化されなかった“ひきこもりのセクシャルな語りの貧困”というテーマは興味深かったことは事実である。それゆえに、“顕在化されにくい当事者ニーズを吸い上げるための装置としての自分史”ということについて論じる前に、なぜセクシャルな語りが表に出にくいのか（→井出草平氏によれば、社会的に困っていることを主張せねば世間から「社会問題」としての認知が得られず金が降りてこない！だからこうした話を公にはできない！）、セクシャルな語りがなされないことでいかなる不都合が生じるのかという点を詳論すべきであったように思えた。

第 83 回日本社会学会大会「若手企画テーマ部会」への派遣　要綱

2010 年 10 月 14 日

関西学院大学大学院社会学研究科　大学院 GP

日本社会学会は今大会（第 83 回大会、2010 年 11 月 6 日（土）、7 日（日）名古屋大学にて開催）より若手の企画するテーマ部会を設けており、全部で 4 つの部会が開催されます。そのうち**若手企画テーマ部会**(1)**「グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在」**(2010 年 11 月 6 日（土）09:30-11:30 に開催）が、本大学院 GP プログラムの共同研究の成果発表の一環となっています（添付の別紙「テーマ部会の概要」をごらんください)。そこで、本大学院 GP プログラムでは、本研究科所属の博士課程大学院生・研究員のうち、希望者を同大会に派遣します。

この派遣は、大学院生・研究員が若手テーマ部会の議論内容と形式・構成などの参与観察を通して、今後の本研究科大学院教育や院生・若手の共同研究の促進にフィードバックをもたらすことを目的としています。このため、上記**若手企画テーマ部会**（1）への参加と、参加レポート（A4　2 枚程度）の作成と提出が義務付けられます。また、ほかの 3 つの若手企画テーマ部会についても、積極的に参加することが推奨されます。

参加日程は、(A）大会 1 日目・2 日目ともに参加、あるいは（B）大会 1 日目のみ参加のいずれかから選んでください。下記のとおり派遣のための費用を大学院 GP プログラムより支弁します。

(A)　大会 1 日目・2 日目ともに参加の場合

①　往復交通費（新幹線指定席)、②　前日（11 月 5 日）および 1 日目（11 月 6 日）2 泊分の宿泊費、③　大会参加費

(B)　大会 1 日目のみ参加の場合

①　往復交通費（新幹線指定席)、②　前日（11 月 5 日）1 泊分の宿泊費、③　大会参加費

※　**若手企画テーマ部会**（1）の開催時間帯が 11 月 6 日（土）09:30-11:30 のため、前泊を基本とする。(前泊しない場合は、理由を明らかにしたうえで GP 事務室に相談のこと）

派遣希望者は 10 月 22 日（金）16:00 までに、別添の派遣希望書に必要事項を記入の上、提出してください。

なお、派遣が決定された人には説明会を予定しています。都合が合わない人には個別の説明もおこないますので、派遣前には必ず大学院 GP 事務室で説明を受けてください。

【参考】　若手企画テーマ部会の概要

若手企画テーマ部会（1）：グローバリゼーションと移動・定住のフロンティアの現在

11 月 6 日（土）09:30　～　11:30　、会場：名古屋大学　本館 SIS4

1. 「野宿者の移動と定住」　山北輝裕（日本大学）
2. 「イギリスの若者ムスリムの社会意識―グローバリゼーション、再帰性、アイデンティティ―」　安達智史（日本学術振興会／東北大学）
3. 「移動する人びとの社会をどのように〈フィールドワーク〉できるのか―〈自己延長的なフィールドワーク〉の試みにむけて―」　稲津秀樹（関西学院大学）
4. 「ネットコミュニティと地域コミュニティが交差する＜場＞―滋賀県犬上郡豊郷町におけるアニメ聖地を事例として―」　谷村　要（大手前大学）
5. 「グローバリゼーションと地元志向」　轡田竜蔵（吉備国際大学）

司会者：川端浩平（関西学院大学）、　白石壮一郎（関西学院大学）
コメンテーター：五十嵐泰正（筑波大学）・塩原良和（慶應義塾大学）

若手企画テーマ部会（2）：社会学は役に立つのか？――社会のなかの社会学

11 月 6 日（土）13:40　～　15:40　名古屋大学　本館 SIS4

登壇者：
　中村由佳（株式会社日経ＢＰコンサルティング ブランドコンサルティング部）
　渋谷晴子（名古屋家庭裁判所　家庭裁判所調査官補）
　國井彰子（株式会社電通リサーチ）
　鎌倉由里子（ＮＨＫ学園文芸センター編集主幹・東京情報大学（放送論）講師）

若手企画テーマ部会（3）：社会学の境界はどこにあるのか？―大学のなかの社会学

11 月 6 日（土）16:00　～　18:00　名古屋大学　本館 SIS4

登壇者：
坂本義和（千葉経済大学）、　周　炫宗（千葉経済大学）
対談者：
石阪督規（三重大学）、　佐藤典子（千葉経済大学）、　多田光宏（早稲田大学）、　田中大介（早稲田大学）

若手企画テーマ部会（4）：ロスジェネに『日はまた昇る』か？―格差社会で希望を探す
（ラウンド・ミーティング）

11 月 7 日（日）09:30　～　11:30　名古屋大学　本館 SIS4

登壇者：
石川良子（日本学術振興会）、　牛渡　亮（東北大学）、　大理奈穂子（お茶の水女子大学）
栗田隆子（有限責任事業組合フリーターズフリー）、　水月昭道（立命館大学）、　阪口祐介（大阪大学）
ファシリテーター：
安達智史（日本学術振興会）、　柳原良江（東京大学）

※　プログラムの詳細は、以下の URL よりごらんください。
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jss/research/conf83_p.html